

目次

85	巻頭言	長谷川 寿一
86	連載「ぼくはこうしてゴリラになった」第21回	ゴリラはやはりこわかった…山極 壽一
88	連載「今日もOSARU日和」第11回	ローバーの転身、シンのほお袋…竹下 景子
90	連載「生態学者が往く」第17回	宮城・伊豆沼の旅…湯本 貴和
92	連載「野生動物を遺伝子から見る」第12回(最終回)	年齢推定にチャレンジ…村山 美穂
94	連載「野生動物のおなかの中の秘密 パート2」第6回(最終回)	絶滅危惧腸内細菌?!…土田 さやか
96	連載「大型類人猿探訪」第24回	日本の四季にくらす霊長類…林 美里
98	連載「ウマ学ことはじめ」第24回(最終回)	ウマは違う群れのウマとも一緒に休むか…前田 玉青
100	連載「自然と芸術」第21回	ささがにの糸つゆの玉…狩野 美紅
102	連載「動物園・水族館だより」第15回	共生社会の実現に向けた動物園の新たな取組…坂本 英房
104	連載「環境教育実践」第23回	国際保全教育会議に参加して…高橋 宏之
106	12月3日は「世界ニホンザルの日」	赤見 理恵
108	コロナ前、最後の野生ゴリラの現地調査	大塚 亮真
110	世界の霊長類 第4回	アカウアカリ…綿貫 宏史朗
111	収蔵資料めぐり 第4回	eb-223 飾り餅烏帽子猿…新宅 勇太
112	イベントのご案内・ご寄附のお願い	

■表紙 P108「コロナ前、最後の野生ゴリラの現地調査」より
樹上でくつろぐシルバーバック 撮影:大塚亮真(大阪大学大学院)

巻頭言

長谷川 寿一 (東京大学名誉教授)

私の生年は 1952 年、今年で 70 歳を迎える。1952 年といえば、幸島での野生ニホンザルの餌付けに成功した年であり、私の一生と日本の霊長類学の歴史はほぼ重なる。本稿では一部自分の霊長類研究にも触れながら、霊長類学の 70 年を私なりに振り返ってみたい。

霊長類学の^{ぼっこうき}勃興期である 1950~60 年代は、今西錦司氏のリーダーシップの下、河合雅雄、川村俊蔵、伊谷純一郎氏らが幸島、高崎山でのニホンザルの野外調査を推し進めた。個体識別に基づく社会構造の解明、近親婚回避やヒト以外における文化的行動の発見などが相次ぎ、さらにフィールドを海外に拡げて、ハヌマンランゲールの子殺しの発見、野生チンパンジー調査のスタートなどが続き、眩しく輝かしい時代であった。1956 年には財団法人日本モンキーセンターが、1967 年には京都大学霊長類研究所が設立され、まさにスタートダッシュの黄金期だった。世界に先駆けて野生霊長類研究に着手したのは、科学論でいうパラダイムシフトであり、ヒトの進化基盤の解明に大きく貢献した。高校時代の私も日本のサル学に強く魅かれた。

70 年代以降は、パラダイムシフトの時代から通常科学へと移行し、創成期世代が築いた礎のもと分子生物学や IT 技術の飛躍的發展もあり、霊長類学の各分野は精緻化、専門化が進んだ。比較認知科学研究や大型類人猿の長期野外研究などの成果は国際的にも高い評価を受け、国内外の多くの若い研究者を引き付けた。私自身が学部・院生時代、ニホンザルとチンパンジーの野外研究に没頭したのもこの時代だった。

21 世紀に入り今日まで、日本の霊長類学は引き続き通常科学として堅実に伸長し続けている。ただし、エネルギーシフトなパラダイムシフトの時期からすでに半世紀を経て、学問としてのインパクトや精彩に陰りも感じられる。私自身は、霊長類学を起点としながら、研究対象を拡げ行動生態学、人間行動進化学へと研究の軸足を移したが、思い返せば、霊長類学だけの世界に飽き足らなくなったからだろう。

初期の霊長類学が輝いていたのはヒトの進化基盤の解明に大きく貢献したからだと述べたが、今や霊長類学単独でヒトの進化基盤を解明できるわけではないことは自明である。ではこの先、霊長類学が進むべき道はどこにあるのだろうか。ヒトが霊長類である以上、ヒトを生物学的に理解するためには霊長類研究は欠かせない。他の分類群の動物も含めて比較研究の枠組みを拡げ、進化人類学との連携を深めることが重要だと思われる。昨年「解体」が決まってしまった京都大学霊長類研究所が、もっと以前に学際的な「人類進化学研究所」に脱皮できていたらと思うこの頃である。



長谷川 寿一
はせがわとしかず

東京大学名誉教授。専門は人間行動進化学、行動生態学。1979~1982 年 JICA 専門家としてタンザニア野生動物局野生動物調査官として勤務。マハレ山塊国立公園建設に従事。現日本モンキーセンター理事、東京動物園協会理事。趣味はイヌの散歩、料理、草刈り、薪割り。